北星論集(経)　第43巻 第１号（通巻第44号）　September 2003

状況タイプと英語の動詞の意味タイプに関する考察

― 意味を取り入れた英語の文のタイプの指導に向けて ―

棚　瀬　江里哉

目　次

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．Lyons における状況のタイプ
Ⅲ．Lyons における結合価スキーマのタイプ
　3.1. 動作主性と結合価
　3.2. 結合価スキーマのタイプ
　3.3. 評価
Ⅳ．中右における状況と命題型
Ⅴ．安藤におけるアスペクト特性による動詞分類
Ⅵ．おわりに

Ⅰ．はじめに

筆者は先稿（棚瀬（2000））において，英文の仕組みの指導を考える方向性として「動詞を中心にした英語の文の組み立て方」を挙げ，「広い意味での動詞の『意味』が問題」となり，「手がかりとして…項構造［ある動詞（述語）が統語的に必要とする意味役割の集合，すなわち，どのような意味役割を持った名詞句とどのように結びつくか］に注目したい。そして…なんらかの形での動詞の意味的分類が必要になるのではないか」(124) と述べた。これを承け，英語の文の要としての動詞，項構造，また動詞の意味タイプに関してさらに深く検討することが本稿の目的である。特に動詞の意味タイプと状況のタイプとの関わりを中心に考察する。そのために，これらの問題を扱っている Lyons（1977:481-500）を取り上げて検討し考察の手がかりとし，さらに Lyons との関連で中右（1994:309-325）及び安藤（1983:63-68）を検討したい。最終的にはこれらの先行研究の検討を基礎理論として，棚瀬（2000）でも述べたように，いわゆる５文型（または７文型）ではとらえられないような意味の問題を取り入れた英語の文のタイプの指導へとつなげてゆくことが目標となる。

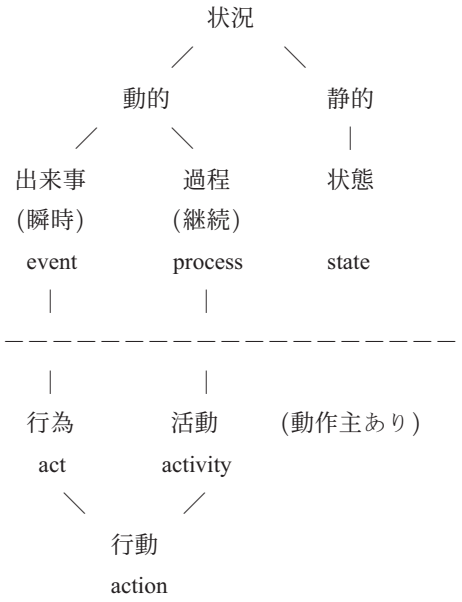
Ⅱ．Lyonsにおける状況のタイプ

まず動詞の意味タイプと関わりが深い「状況」situation のタイプについて検討したい。状態 state と，出来事 event，過程 process，行動 action をすべてカバーする用語として状況を用いることにする。

まず，静的状況（状態）と動的状況を大きく区別する。状態とは，起きる happen のではなく，存在するexistのであり，それが続く間は，同質的，連続的であり，変化しない。

動的状況は，起きるのであり，瞬間のこともあれば持続することもあり，同質的，連続的とは限らず，時間的な形態は様々である。時間的に継続するのなら過程 process であり，瞬間的なら出来事 event である。また，その状況が動作主agentにコントロールされているか，否かという区別は重要である。動作主にコントロールされている動的状況は行動 action である。動作主がコントロールする過程を活動 activity と呼び，動作主がコントロールする出来事を行為 act と呼ぶことにする。なお，時間的に持続するという点では，状態と過程（活動を含む）は類似しており，出来

事（行為を含む）とは対照的である。



なお，先に動詞の意味タイプと状況のタイプは「関わりが深い」と述べたが，事実このような状況の分類と動詞の意味タイプの分類を直結させている先行研究も見られる。Jackson（1990）の分類は，situation type 状況タイプをまず state 状態と non-state 非状態に，次に non-state の non-agentive 動作主なしを event 出来事，agentive 動作主ありを action 行動とし，さらにその下にそれぞれ durative 持続的，punctual 瞬間的などを用いて分類するという Lyons と共通点の多いものだが，それらをそのまま動詞の意味的なクラスとしても用いている。しかし Lyons は述語動詞に関しては，動作主性，因果性，使役性などの概念を用いた，異なった形での分類を試みている。それを以下で見て行く。

Ⅲ．Lyonsにおける結合価スキーマのタイプ

3. 1. 動作主性と結合価

動作主性は難しい概念だが，典型的な例は次のように考えられる。有生の存在物 X が意図的に責任を持って自らの力，またはエネルギーを用い，ある出来事または過程を引き起こすものである。動作主性がもっとも明らかに関わっている出来事または過程の典型的な例は，X または他の存在物 Y の物理的状態または位置の変化をもたらすものである。英語は，動的状況の中で，動作主がコントロールするものとそうでないものをかなりはっきり区別している。すべての過程と出来事（＝すべての動的状況）は「起きること」happening だが，行動（活動と行為）だけが「すること」doing である。

動作主性をさらに論じる前に，状況を分類するのに役立つ結合価 valency という概念を取り上げることにする。これは，基本的には述語動詞がとる項の数と考えてよい。たとえばいわゆる他動詞は結合価が２である（２価である)。重要なのは，動詞の意味タイプと結合価には結びつきがあることである。格文法は，結合価を動作主，被動者，原因，結果，起点，着点といった意味役割と関連づけて説明しようとしている。これらの意味役割を伝統的な格と区別するため，今後結合価役割と呼ぶ。

3. 2. 結合価スキーマのタイプ

使役構造の統語論と意味論は近年語彙分解の仮説と関わって論じられてきた。それによれば，他動詞killの結合価と意味はともに，動詞 die を含む自動構造を抽象的な動詞 CAUSE の目的語として埋め込むことによって説明される。

基底の意味表示における CAUSE の主語は動作主を表す名詞句であり，目的語は動作主の活動の結果もたらされた状況を表す。X CAUSE（Y DIE）が X CAUSE-DIE Y と変形され，さらに CAUSE-DIE が kill と語彙化される。

使役性は因果性という概念と自然に結びつく。因果性の観点からは，動作主はその行為

によってもたらした状況の原因ということになる。また因果性と動作主性の両者には自然な結びつきが存在し，英語の文法構造と語彙構造にはその結びつきが反映されている。因果性と動作主性（あるいは原因と動作主）を同じものと見なす傾向は自然な，おそらくは普遍的なものである。使役性は，因果性と動作主性の双方に関わるものである。

K killed Y が表す状況は，二つの異なる結合価スキーマを用いて分析することが出来る。ある観点からは kill は我々が作用 operative 動詞と呼ぶものであり，殺すことは，被動者に対して行われ，影響を与える作用である。別の観点からすれば kill は通例使役 factitive 動詞と呼ばれるもので，ある原因がある結果をもたらす過程や出来事を表す。そこで，X が Y を殺したという状況の二つのスキーマは次のようになる。

１．AFFECT（AGENT, PATIENT）（operative）
２．PRODUCE（CAUSE, EFFECT）（factitive）

さらに，動作主性と因果性のつながりによって，１.と２.を結びつけた第三のスキーマが可能である。

３．PRODUCE（AGENT, EFFECT）（operative-factitive）

これらの解釈は大略以下のようなものである。

１．AGENT 動作主が PATIENT 被動者に AFFECT 影響を及ぼす（作用）
２．CAUSE 原因が EFFECT 結果を PRODUCE 生み出す（使役）
３．AGENT 動作主が EFFECT 結果を PRODUCE 生み出す（作用－使役）

動作主性が関わる典型的な状況 － 行為が被動者の物理的状態または位置の変化をもたらすもの － に関してはこれらの３つのスキーマはすべて当てはまるのは容易に見て取れる。

また，使役性という点から見れば，kill の結合価と意味は３.にもっとも近いことも容易に見て取れよう。先に X CAUSE（Y DIE）と表しておいたものは，PRODUCE（X, DIE（Y））と再定式化することが出来る。X は動作主であり，DIE（Y）は X の行為の結果である「Y の死」を表す。しかし，また X killed Y が表す命題は X が Y に対して何かを行った，すなわち，AFFECT（AGENT, PATIENT）とも解釈できる。

上の１.から３.の３つのスキーマは伝統的に他動詞と呼ばれる２価の動的動詞の大部分をカバーできる。さて，移動動詞も２価の動的動詞の重要な下位クラスである。英語における典型的なメンバーは come と go であり，移動の起点か着点を指示する表現を補部としてとることができる。

移動動詞の結合価を扱うために，次のスキーマを加えることにする。

４．MOVE（ENTITY, SOURCE）
５．MOVE（ENTITY, GOAL）

４．ENTITY 存在物が SOURCE 起点から MOVE 移動する。
５．ENTITY 存在物が GOAL 着点へ MOVE 移動する。

あらゆる運動は必然的に起点と着点の双方と関わるので４.と５.を結びつけると

６．MOVE（ENTITY, SOURCE, GOAL）
６．存在物が起点から着点へ移動する。

さらに，存在物は動作主によって起点から着点まで動かされることもあり，その場合はこの３つのスキーマは３.における EFFECT として扱うことが出来る。

３a．PRODUCE（AGENT,（MOVE（ENTITY, SOURCE）））
３b．PRODUCE（AGENT,（MOVE（ENTITY, GOAL）））
３c．PRODUCE（AGENT,（MOVE（ENTITY, GOAL, SOURCE）））

３c．動作主が「存在物が起点から着点へと移動する」という結果を生み出す

動的な状況を記述するスキーマである１．から６.に，静的な状況を扱う次の２つのスキーマを加えると，幼い子供の発話の大部分を説明できる。

７．BE（ENTITY, ATTRIBUTE/CLASS）
８．BE（ENTITY, PLACE）

７．存在物が ATTRIBUTE 属性を BE 持つ／CLASS 類に BE 属する
８．存在物が PLACE 場所 にBE ある

これまでに論じた結合価役割が普遍的なものであるということを疑う理由はほとんどない。我々が設定した９種の結合価役割（動作主，被動者，原因，結果，存在物，起点，着点，属性／類，場所）の中で，存在物と場所が無標で中立のものと考えることが出来る。

参与者役割は主語や動詞の補部として機能する名詞句（と，場合によっては，場所を表す副詞句）と結びつく。英語や他の多くの言語に関して，ある種の状況と結びつく参加者役割や状況役割の中で階層的な順位づけが存在し，この順位が，少なくとも部分的には，どの表現が主語か直接目的語か間接目的語かその他の補部として機能するかを決定するように思われる。動作主を指示する表現は動詞の主語になる傾向があり，被動者を指示する表現は目的語になる傾向があり，道具を指示する表現は付加詞になる傾向がある。

3. 3. 評　価

以上見てきたように，動詞の意味タイプ，及び動詞と結びつく項の意味役割，さらには文法機能との関係などに関して，Lyons は動詞の基本的な意味タイプを AFFECT, PRODUCE, MOVE, BE とし，９種の結合価役割をそれぞれと結びつけて８タイプのスキーマを提示した。「幼い子供の発話の大部分を説明できる」ということは，これら８種が状況を記述する基本的なスキーマだということであろう。Lyons の分析の長所の一つは，動詞の意味タイプの分類と動詞がとる項の意味役割が体系づけられて直接に結びついていることである。たとえば Halliday（1994）では過程 process（この場合は Lyons の状況に相当する概念）が６つに分類されている。ただし一つ一つの過程のタイプにそれぞれ異なる参与者が設定されており（material process には Actor, Goal，mental process には Senser と Phenomenon など）参与者（意味役割）の種類は計14となっている。Jackson（1990）では動詞の基本的な意味タイプ（状況の基本タイプでもある）は STATE 状態， EVENT 出来事，行動 ACTION の３つなのだが下位区分され，結局15の動詞の意味タイプに分類している。さらに，あまり体系づけられた形ではなく，計14の参与者役割 participant role を扱っている。これらの例と比べれば Lyons のスキーマタイプの方がすっきりしていると言えよう。

しかし，先に述べたように，Lyonsは状況のタイプの分析と述語動詞の意味タイプ（スキーマタイプ）の分析を分けて行い，両者は(関連性はあるものの）直接結びついていない。また，状況のタイプの方では，時間的な形態に基づく分類に動作主の有無をクロスさせた形で分類しており，結局状況のタイプがいくつでどういう関係にあるのかがわかりにくくなってしまっている。また，結合価スキーマの方では，たとえば kill が，作用，影響などの観点からは，動作主と被動者と結びつく，

使役性の観点からは（作用－使役動詞としては）動作主と結果と結びつく，という分析はおもしろいのだが，同一の状況に１.から３.の３つのスキーマが重なったり重ならなかったりしている。また，４.と５.の合成である６.をも基本スキーマとして挙げている。これらは文のタイプの指導に関していえば，学生にとってのわかりにくさにつながる問題点とも言えよう。

そういった観点からすると，基本タイプが決まっており，ほかにはその下位区分，もしくは合成，もしくは副次的タイプなどを考えた方がわかりやすいと思われる。以上の問題点に関連して，Lyons とも共通の考えが見られる中右を次節で取り上げ，Lyons との共通点，および相違点などを検討してみたい。

Ⅳ．中右における状況と命題型

まず，中右によれば，世界を構成するもっとも基本的な状況の類型は「状態」state と「過程」process と「行為」action である。各状況は命題型に対応しており，命題型の内部構造は「述語」と「項」の関係からなる。ここで軸になるのは述語である。その固有の性質によって，項の数とその意味役割が決まるからである。

基本命題形のスキーマはこうなっている。

１．状態：BE（THING, PLACE）
２．過程：GO（THING, PLACE）
３．行為：DO（ACTOR, THING）

各述語は二つの項をとり，それぞれに意味役割が与えられている。

状態の命題型は BE「ある」の関数で表され，THING「もの」と PLACE「場所」の項をとる。これは

「何がどこそこにある」(空間的位置)
「何がどうこうである」(性状，抽象的位置)

という関係を表す。

過程の命題型は GO「なる」の関数で表され，やはり，二つの項，THING「もの」と PLACE「場所」をとる。しかし，GO は

「何がどうなる」

という関係であり，状態変化と位置変化（空間的移動）を表す。GO の PLACE は SOURCE 起点，GOAL 着点，PATH 経路，DIRECTION 方向など，位置とは異なり，方向性を持つ意味役割である。

状態と過程の例を挙げる。

１．There is a new roof on the cottage.
２．Mary is in good health.
３．We came from the thater.
４．Ann fell ill.

１.と２.は状態であり１.は空間的位置，２.は性状，抽象的位置である。３.と４.は過程で，３.は物理的移動，４.は状態変化，抽象的移動である。

行為は DO「する」の関数で表され，二つの項，ACTOR「行為者」と THING「もの」を要求する。典型的には

「だれかが何かをする」

という関係を表す。
なお，ACT は以下の３つに下位分類される。

３ａ．AFFECT（ACTOR, PATIENT）
３ｂ．EFFECT（ACTOR, RESULTANT）
３ｃ．ACT（ACTOR, RANGE）

AFFECT は「影響」，EFFECT は「結果」，

ACT は「動作」を表す行為述語である。

PATIENT は「被動者」，RESULTANT は「結果者」，RANGE は「指定領域」を表す意味役割である。例文を挙げると

a. John dug the ground.
b. John dug a hole.
c. Ann slept a sound sleep.

a. の dig は影響動詞であり行為者は被動者 ground に影響を与える。b. の dig は結果動詞であり，行為者は行為の結果 hole という結果物を生み出す。c. は特殊な例であり，指定領域 sleep は動詞の表す行為と一体化し，全体で単一の行為を表す。

さて，注意しなければならないのは，中右は状況タイプと述語タイプを直結させてとらえているのだが，この状況タイプは用語が「状態」「過程」「行為」と，Lyons の状況タイプを思わせるものであるが，実際にはむしろ Lyons の結合価スキーマの方につらなる分類，すなわち「時間的形態」による分類ではなく，とる項との意味的な関係による述語の基本的な意味的スキーマのタイプであるということである。

そこで，中右の述語タイプと Lyons の結合価スキーマを比較してみよう。共通点は容易に見て取れると思われる。動詞（述語）の基本的タイプは Lyons が AFFECT, PRODUCE, MOVE, BEの４タイプ，中右が BE, GO, ACT の３タイプであるが，BE は共通，中右の GO も移動を表し，MOVE に通じる。Lyons は AFFECT と PRODUCE の共通性について述べているし，逆に中右の ACT の下位区分は Lyons の AFFECT と PRODUCE の違いにつながるものである。さらには，Lyons が無標で中立とする存在物と場所という意味役割に対して，中右もものと場所を基本的な意味役割としてたてている。このように，基本的な考え方としては共通なのであるが，一つ違う点として，中右は「世界の状況は過不足なくこれら三つの類型［状態，過程，行為］に分けられる…つまりこれら三つの類型が正補集合の関係にある」と述べている。一つの状況に関して類型（スキーマ）同士は重ならない，ということで，Lyons の問題点である，一つの状況に複数のスキーマが対応する場合もあるという分かりにくさはなくなっているわけである。

ただし，中右の命題型には Lyons ともつながる問題点が一つあり，それは各述語のとる項の数が二つに決まっていることである (Lyons の場合は二つ以上)。これがなぜ問題かというと，補部をとる自動詞（いわゆる SVC, SVA タイプ）の場合は良いのだが，補部をとらないいわゆる SV タイプの自動詞を分析しにくいからである。中右もこの問題を承知しており，An apple fell. においては fall が go down に分解でき down が方向の意味役割を担い語彙編入されているとか，John jogs a lot every morning. においては自動詞 jog を do + jogging と因数分解することに妥当性がある，などと分析している。しかし幾分すっきりしない説明であることは否めない。中右が同一の用語を用いている例として挙げているチェイフと比較するとこの点がはっきりする。

チェイフ（1974:97-104）の分類は

１．	The wood is dry.	状態
２．	The wood dried.	過程
３．	Michael ran.	動作
４．	Michael dried the wood.	過程動作

というもので，１．２．４．の wood はすべて受動者であり，３．と４．の Michael はともに動作主とされる。状態は２項をとる（SVC 型の）自動詞であり，過程と動作は１項しかとらない（SV 型の）自動詞であり，過程動作が２項をとる（SVO 型の）他動詞という

ことになる。分析の細かい点の是非はともかく，動詞の項の数を２と決めてしまった中右と比べて，自動詞と他動詞という点に関してはずいぶんとすっきりしたものになっている。少なくとも，学習者への指導のための基礎理論という観点からは，SV 型の自動詞を扱いにくいという点で中右の分析は問題があると思われる。

さて，中右は状況の時間的形態を命題型と直接結びつけてはいないが，「状態・過程・行為の区別はとりわけ，動詞に内在的な時間的側面を反映したものである」(346) とも述べている。そこで，Lyons の状況タイプの方につらなる，「時間的形態」，「時間的側面」(鈴木・安井（1994:61の「時間の図式」も参照）とより直結した動詞の意味タイプの分類を考えるため，次節で安藤（1983）を検討することにする。

Ⅴ．安藤におけるアスペクト特性による動詞分類

安藤はいわゆる動詞のアスペクト特性によって英語の動詞を下位タイプまで含めると４タイプに分類した。まず，進行相をとらない「状態的」動詞と，とる「非状態的」動詞に分けられる。

*I am having two sisters.	状態的
I am reading Shakespeare.	非状態的

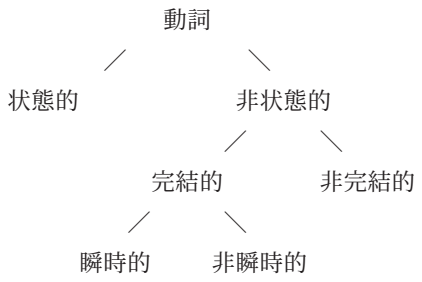
非状態的動詞は in two hours をとる「完結的」動詞と for two hours をとる「非完結的動詞」に分けられる。

He left in/*for two hours.	完結的
I sang *in/for two hours.	非完結的

完結動詞はさらに進行相が反復を表す「瞬時的」動詞と，進行相が完結への接近を表す「非瞬時的」動詞に下位区分される。

He was jumping with joy.	瞬時的
The bus is stopping.	非瞬時的

結局状態的動詞，瞬時的動詞，非瞬時的動詞，非完結的動作動詞の４タイプに下位区分されることになる（なお，状態的動詞も非完結的である)。



これは「動詞タイプ」の分類であるが，(動作主の問題をのぞいて考えた場合の) Lyons の「状況タイプ」の分類ときわめて類似していることは明らかであろう。しかし，Lyons の３タイプの状況の下位区分では扱われていなかった「完結性」という概念が取り入られており，安藤の方は下位区分が４タイプになっているという違いにつながっている。この問題に関しては，やはり動詞の意味タイプの分類を扱っている鈴木・安井（1994:79) も，「問題となっている動作・行為に概念上『終結点』が含まれているか否かということが，かなり重要な弁別素性としての役割を果たしている」と述べており，少なくとも考慮に入れるべき大きな問題であるということは言えるであろう。

安藤の分類は動詞の内在的な時間的意味を考える上で有効であり，本質的な重要性を持つと思われる。ただし，すでに見てきた Lyons と中右のスキーマと比べて今度は逆に動詞とそのとる項の関係が分からないという問題点がある。

なお，この分類にはもう一つ大きな問題点があることを付け加えておかなければならない。上述の鈴木・安井もやはり動詞の４分類を行っている（61-82)。

１．動作動詞 run
２．完成動詞 draw（a circle）
３．達成動詞 reach（the top）
４．状態動詞 love

そのために用いたテストも，進行相をとるか，また，for＋期間と共起するか，と安藤と共通のものである。もう一つのテスト，It took ＋ 期間と共起するかは内容的に in ＋ 期間と共起するかとほぼ同じといってよいので，結局同じようなテストによって同じような分類をしたと言えそうである。動作動詞は安藤の非完結的動作動詞に，完成は非瞬時的に，達成は瞬時的に，状態は状態的にそれぞれ相当する。

しかし，具体的な中身を見ると問題点が現れてくる。まずそもそも，対応しているはずの達成と瞬時的の進行相に関して基準が逆になっている。鈴木・安井の達成動詞 reach the top は進行相をとらないし，安藤の瞬時的動詞 jump は（反復を表す）進行相をとる。それではこの二つの分類はまったく食い違っているのかというとそうとも言えない。両者が挙げているそれぞれの動詞の例のリストを見ると，鈴木・安井の達成動詞の方にも hit のような（反復を表す）進行相をとる動詞が含まれているし，安藤の瞬時的動詞の方にも recognize のような進行相をとらない動詞が含まれている。hit, recognize, さらには start などは両者に共通して含まれている。細かい分析は省くが，同じようなテストを用いた上記２組の分類に，共通点とともにこのような食い違いや例外が存在するということは，少なくとも単純なテストによる明快な分類とは言えないということである。これに類する動詞の４分類は広く行われているが（影山(1996:41-43)，Dowty（1979:55-60, 66-71), Van Valin and LaPolla（1997:91-102）参照)，同じようなテストを用いつつ，具体的な分類は微妙にずれている。その一つの理由は鈴木・安井のいうように，これらは「動詞の分類というよりは，むしろ，動詞の用法の分類によく当てはまるもの」(1994:82）だからであろう。たとえば，dig a hole には終結点があり完成動詞だが，dig the ground ならば終結点がなく動作動詞となる。同様に，push a cart には終結点がなく動作動詞であるし，push a cart to the store ならば終結点があり，完成動詞となる。dig や push には動詞としてそれぞれに内在的意味があることも事実であろうし，実際の状況において用いられた場合に異なった表れ方をすることがあるというのも事実であろう。これらの問題点をふまえた上で，やはり文のタイプの指導につながる有力な動詞の意味タイプの分類であると思われるので，なるべくわかりやすい形で具体的な動詞（もしくは動詞句，もしくは文における動詞の用法)の分類につなげることが課題となる。

Ⅵ．おわりに

英語の文の組み立ての指導に向けての我々の基本的な出発点は「英語の文の組み立ての中心は動詞である」ということであった。すなわち，動詞が要であり，動詞とその結びつく項との意味関係のタイプがまず問題となる。そのような関係を表すためには CAUSE, EFFECT, BE, GO, ACT などといった基本的意味関数を用いる表示が有効と思われる。

しかし同時に，動詞（述語）が世界の「状況」を記述する，さらにこの「状況」は時間的形態，時間的側面と結びついたものである，というのは多くの研究者が述べていることである。そこで動詞のいわゆる内在的アスペクトが問題になってくる。

つまり動詞の意味構造を考える際に，動詞の外との結びつき，項構造と，内的意味構造の双方がとらえられるような動詞の意味タイプの分類が望ましいということである。すなわち，本稿における，一方では Lyons の状況タイプ，安藤や鈴木・安井の動詞タイプの分類と，他方では Lyons の結合価スキーマ，中右の状況の命題型の分類という方向性をともに何らかの形で取り込み反映させるようなとらえ方，分類である。

［参考文献］

安藤貞夫．英語教師の英文法．大修館書店．1983．

W.L.チェイフ．意味と言語構造．大修館書店．1974.

Dowty, David R. Word Meaning and Montague Grammar. Reidel. 1979.

Halliday, M.A.K. An Introduction to Functional Grammar. Edward Arnold. 1994.

Jackson, Howard. Grammar and Meaning. Longman. 1990.

影山太郎．動詞意味論．くろしお出版．1996.

Lyons, John. Semantics 2. Cambridge UP. 1977.

中右実．認知意味論の原理．大修館書店．1994.

鈴木英一・安井泉．動詞．研究社出版．1994.

棚瀬江里哉．英語の文における意味的機能の検討．北星学園女子短期大学紀要第36号．2000.

Van Valin, Jr.,Robert D. and Randy J. LaPolla. Syntax: structure, meaning and function. Cambridge UP. 1997.

[Abstract]

A Study of Semantic Types of English Verbs and Situation Types :
Toward Instruction of English Sentence Types on a Semantic Basis

Eriya TANASE

This paper examines the semantic types of English verbs in relation to situation types. English verbs are pivotal in sentences, and it is necessary to examine closely and analyze the argument structure, or the semantic relationship of the predicate verb and its arguments. Analyses of situation with valency-schemata, proposed by Lyons, and propositional types, proposed by Nakau, are effective in defining and expressing the types of this relationship. English verbs are, however, also related to situation in terms of time contour. Ando and others classify English verbs into four groups, traditionally called states, activities, achievements, and accomplishments. This kind of analysis is also necessary in trying to grasp the whole semantic feature of English verbs. A system of classifying the semantic types of English verbs which incorporates the two kinds of analysis mentioned above is, therefore, to be desired.